

IT-2-14 財務管理コースの実施

1. はじめに

9月16日から26日まで、財務、会計分野の管理職とそれに準ずる参加者18名を選考して、今年で3回目となる「財務管理」のコースが実施されました。今回の女性参加者の1名は、終始全身を覆う黒いスカーフ「ヒジャブ」を着用していました。こういった敬虔で保守的な層にも、女性の社会進出の重要性が理解されつつあります。今後も受け入れ態勢に万全を期しながら、女性参加者を積極的に受け入れていきたいと思っています。

2. 研修内容

(1) JCCPでの研修内容

① 日本の石油産業

代替性の低いパイプライン輸入を控除すると石油の商業市場としての日本は、シェール革命により原油輸入を減らす米国を上回り、中国、EUと並ぶ巨大市場であるという事実は研修生に新鮮に映りました。

② ワークショップ「ネゴシエーション」、「財務会計」

研修生同士のコミュニケーションを通じて、ハンズ・オンの作業を進めていくことで、結果として学ぶべき趣旨にたどり着く構成となっており、大いに盛り上がりました。

③ ワークショップ「プロキュアメント」

マーケティングにおけるアウトレットの競争力は、そこに至るコストの積層であり、事業の競争力を維持するうえで重要なポイントとして、経営幹部に不可欠な素養です。

④ ワークショップ「リスクマネジメント」

今日の石油マーケティング、トレーディングはデリバティブ取引と切り離しては考えられなくなっています。部外者にとっては難解ですが、参加者には非常に真剣な取り組みが見られました。

(2) 実地研修先および研修内容

① 太陽石油㈱ 四国事業所

エネルギー供給構造高度化法に適合するため各社が設備縮減や製油所の閉鎖を行う中、逆に、RFCC（残渣流動接触分解装置）を新設した製油所です。ここで高度化法を含む日本の石油産業の現状、石油精製および製品出荷、物流の研修を行いました。

② JX日鉱日石石油基地㈱ 喜入基地

世界最大の原油輸入中継基地で、外航タンカーからの原油受入れ、貯蔵、さらに製油所への内航転送業務の実地研修を行いました。通船による海上からの分かりやすい荷役設備の視察と大型タンカーの荷役状況は研修生の印象に深く残るものとなりました。



JX日鉱日石石油基地㈱ 喜入基地

3. まとめ

コースの背景と目的／コース設定の趣旨を振り返って

「欧米ではなく、わざわざ『日本』に来て研修する意義は何か」

本コースは、参加各産油国の要望や意見をうけて2011年のコースプログラム刷新検討会の検討結果により新設されたコースです。今回3年目の研修終了に当たり、コース設定の趣旨と実施状況を振り返ってみます。

（産油国から見た日本の位置付け）

(1) 産油国では今日においても、様々な分野で、欧米企業に依存せざるを得ない場合があります。産油国にとって日本やその他の国は、欧米との関係についての「当て馬」、または欧米を牽制するカードであるというのが、残念ながら実情です。

（日本のニーズとJCCPの目的）

(2) 輸入原油、なかでも中東原油に死活的に依存する日本としては、供給の安定のための最も重要な方策が人的な、また精神的な紐帯の確立、強化であり、これがJCCP事業の目的です。

（産油国の研修ニーズ）

(3) 一方で産油国側から見れば、今日の主要産油国の最大の課題のひとつは、増加する自国若年層の就業の確保を通じた君主制国家の不安定化の回避です。そのため、外国人の占める職を自国民に置換する政策を進めています。

（研修ニーズ①）

(4) 自国民化の目標のひとつは、依然欧米人によって占められている財務やトレーディング、石油デリバティブなど専門性の高い幹部のポストです。専門的なこれらの技術の移転を日本で受けること、または受けられることを示すことで、初めて欧米人からの技術とポストの移転が可能となります。これが、欧米に求めることができない日本ならではの価値のひとつです。

(研修ニーズ②)

もうひとつの目標が、出稼ぎ労働者の仕事の自国民への置き換えですが、これは失敗すると自国民の間に大きな格差を生じさせ、社会的な不満を生む危険が伴います。潜在的に今日でも激しい階級間の対立を孕む欧州や貧富の格差の大きな移民社会米国は、このためのモデルとなりえません。日本の産業は、ほぼすべて自国民で構成されおり、国家レベルでも同様に豊かで競争力のある立憲君主制を維持しています。これこそが湾岸産油国が、日本にのみ求めることができる鑑なのです。

これに対応して、以下の方針でコースプログラムを設定しています。

- (1) 国営石油会社幹部として必要な素養のうち専門性や難易度の高いものを提供すること。

- (2) 製油所やターミナルなど石油事業の現場や日本各地を訪問することで、上から下まで自国民のみで構成される組織や社会の運営に数多く触れること。

プログラムの水準は、ポスト・MBA 研修、研修の手法は「ハズ・オンのワークショップ形式によるケース・スタディー」を採用しています。教材は、すべて実務経験をもとにした書き下ろしの事例集として、登場人物や舞台設定はほぼ全て日本人や日本と関連したものとなっています。

この3年間については、参加者の熱心な協力を得て、改善を積み重ねつつ設定の趣旨に沿ってコースを実施できたと思います。引き続き、より充実したコースとするよう努力したいと思います。

(研修部 神保 雅之)